

カウンセリングを受けている大学生の、
中学・高校における精神的状況について
——いわゆる“良い生徒”の精神的問題——

A propos du état psychologique, pendant le collège et le lycée,
des étudiants qui venaient consulter à auteur sur leur incertitude,
leur angoisse et leurs symptômes psychologiques.

加藤 雄一

Yuichi KATO

Auteur a considéré l'état psychologique, pendant le collège et le lycée, des étudiants qui venaient consulter à auteur (psychiatre) sur leur incertitude, leur angoisse et leurs symptômes psychologiques, surtout à propos des suivants.

1. le caractère de l'obsédé et la tendance asthénique comme, par exemple, le vulnérabilité psychique et le sentiment d'incertitude éprouvé au cours des rapports avec compagnons d'études, qui sont défendus par le caractère d'obsédé (mécanisme de défense obsessionnel).
2. la détention de la confiance de soi-même (détention du sens d'identité) s'appuyé sur l'identité due à résultat d'étude qui compense d'une manière de mécanisme de défense intellectualisatrice le sentiment d'incertitude en rapports avec compagnons d'études.
3. la rapport entre les modes d'échec de la détention d'identité et de la confiance de soi-même et la relation avec les compagnons d'études de la même sexe et de la même génération.
4. et autres.

〔I〕ま え が き

名古屋大学総合保健体育科学センターの精神衛生相談に多くの学生が訪れてくるが、神経症のような症状化した悩みは、表1（笠原嘉氏¹⁾や清水将之氏²⁾の論文を参考にした）でも示されているように、中学や高校において発現していることがしばしばである。また、自己の主体性に関連するような同一性をめぐる諸問題によって、抑うつ気分や情動不安定を訴える学生の場合でも、その多くは、中学あるいは高校の時期に、その準備状態を有している。彼らは、学業成績にもあらわれるように知的には高く、学校内での役割に対しても十分な責任をもって答えるような一強迫的で過剰

とも言えるような適応のあり方をとる場合もしばしばである一、いわば“良い子、良い生徒”であることが多い。

他方、表2でもかんたんに示したが、H. S. Sullivan¹⁾³⁾⁴⁾⁵⁾も言うように、両親に対する依存から、同性同世代の仲間との親密な関係 (intimacy) や、青年期における個別的他者としての2人の関係などへと、より社会的な広がりをもった友人達との親密な関係が、学童期から青年期にかけての大きな発達課題となる。また、池田由子氏⁶⁾は、中学生の9割が親友をもち、相談相手として友人を選んでいると言う調査結果を示され、中尾道子氏⁷⁾も、中学生に対する調査から、その年代では友人関係が多岐の精神的問題であることを、

表1 精神障害発症と発達¹⁾²⁾

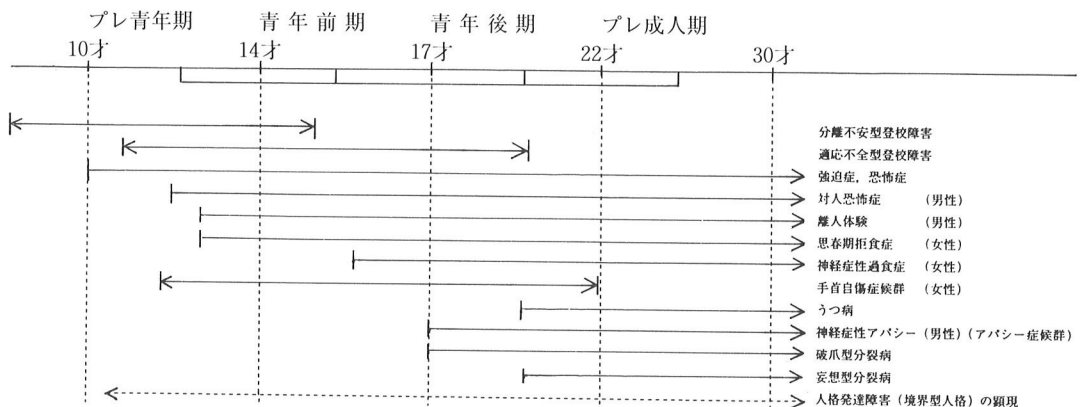


表2

学童期

- 両親を通してみた社会（他者）から、友人を通してみた社会へ。（対人関係のひろがり）
- 両親（家族）と友人（社会）との間のアンビバレンス。
- 周囲からの承認を獲得するための社会的に承認される方法がある程度学ぶ。
- 友人との競合・比較，葛藤によって良き経験化を行う。（逆に，自己尊重が傷つき，劣等感や自己評価の低落もある）
- 友人関係や身体の急激な変化を通して，心理的次元および身体的次元での自己のイメージの形成が始まる。（自分という感覚—自我同一性—の形成）
- 自己内の葛藤を正面から自覚するにはまだ未熟であり，また，友人関係は群れ集いので，代替不能の個別者として友人を自覚することにもなお未熟である。（友人の幸福が自分の幸福となる眞の愛は未発達）

青年期

- 同姓同輩者との親密さ (intimacy) の経験。（親友—chum ↔ 個別者としての他者の自覚）
- 次いで，異性として現われる他者への，性的願望もともなった親密さの経験
- 他者の体験を観察し，自分の経験と比較し，成功や失敗を人格化する。
- 個人としての考え方や価値感を相互的に確認しあう（同意的確認）ことで，自己価値を確立し同定する（同一性の確立）
- 孤独の体験を通して，自己を内省し，自己を発見する。
- 自己内の体験を自覚し，それに直面しうる発達段階にある。
- 同一性の確立。（自己イメージ，自己感覚，存在理由，主体性，家庭・社会・職業・価値・宗教・性における同一性の確立）

実証的に示されている。

以上のような事から，他者との関係，とりわけ同性同世代関係における Intimacy の課題や，それと関連する同一性意識の課題は，青年期が自己と直面することのできる発達段階にあることと相

まって，成長の契機でもあると同時に，危機的要因ともなりうることを示している。本論文では，以上の事から，大学生のカウンセリングでみられた，中学・高校での“良い生徒”を，友人関係との関連において若干の考察を行なうものである。

なお、中学や高校における精神的諸問題の前提として、生活史や両親との関係が当然考察されなければならないが、以下でのべる代表症例では、主として中学・高校での状況を中心として報告した。

〔Ⅱ〕代 表 症 例

(1) 離人神経症の症例 (Aさん)

自分が思考し行動しているという実感がなく、時間の流れを感じない、楽しさを感じないという離人体験が中学3年以来続いている。

元来から内向的で友人関係に自信がなかった。成績はトップで、とくに数学が得意だった。成績さえよければ人間関係は問題にならないような感じがあったが、一方ではこれでよいのだろうかという気持ちもあった。中学3年の時、提示された数学の問題を、各自でノートに書いて解いている時、数学の先生がAのノートをのぞいて、“君は賢明だと思っていたが、けっこう頭が固いんだね”と云った(あるいはそのように云われたとAは体験した)。尊敬していた先生にそのように云われて、Aは、“自分は融通がきかないし、ひらめきもない”と云われたと思って、一ぺんに自信を喪失してしまった。それ以来、能力がためされるような状況ではとくにひどくなるような、眼の疲れや頭重感がおこるようになり、だんだんと友人からも離れ、離人感も始まるようになった。

(2) 対人恐怖症の症例

1) Tさん

勉強をしなかったり、悪い成績をとったりすると、母親によくつねられた。母親の是認を得ようとよく勉強したので、成績は常に上位であったが、友情を犠牲にしていないかと内心ではとても不安であった。中学・高校と級委員に連続して選ばれていたが、高校2年に始めて選ばれなかった。これまで選ばれていていい気になっていたから、その自分の心を皆がみすかして選ばなかったのだと感じ、その後対人関係をひかえ目にし、他人の自分に対する思わくやまなごしを気にするようにな

り、次第に、自分が友人達のグループに入ると場を白けさせてしまうと思うようになった。

2) Sさん

幼少期より虚弱であり、内気、小心、偏食があったことから、幼稚園、小学校、中学といじめられっ子であった。そのため、人との関係に臆病となり、いつも仲間はずれであったが、成績は常に上位であった。高校1年の時に、成績によるクラスわけがあり、Sは成績の良い生徒のためのクラスに入ったが、そのために唯一の親友とわかれることになってしまった。Sは表には出さなかったが、この事で教師に不信感を抱くようになり、強い孤独感とともに、他人を視る眼が警戒的となり、自分に対する他人の思わくに過敏となった。今では、他人との会話や、初体面の挨拶で強い緊張を覚えるようになってしまった。

3) Kさん

過疎の田舎から都会の中学に入学したが、内気でおとなしい子であったので、人付き合いが下手で劣等感をもっていた。学業成績は中学・高校を通してトップクラスにいたが、とくに、中学の時に、県下の中学生の模擬試験で5番の成績をとったことから、かえって皆からうき上がってしまった。また、性格的には全く不向きであるにもかかわらず、学業成績がよいため生徒会の委員にされたりした。勉強ばかりして、友人関係の下手な人間は人間的に欠陥があると思う一方、自分を疎外する周囲の世界をうらむ気持ちも強くなっていった。

4) Hさん(女性)

友人はいないことはなかったが、自分から求めることはなく、また真の友人が自分には作れないと思っていた。中学2年の時、宿題を自分でやらずに他人のノートをうつす友人がいて、貸すのがいやだったがやむを得ず貸してやった。そのことを何げなく受持教師に言ったら、その教師が例の友人に話したらしく、Hが告げ口をしたという噂がひろまってしまった。その後仲間はずれにされることが多くなり、成績のよいことをみせびらかしていると友人達に思われてやしないかと不安が強くなり、また、他人の思わくに左右されるよ

うな自分の性格に疑問を抱くようになった。

5) Iさん

内気で、交友のせまい性格だった。中学2年の時に、手紙交換あそびと云うゲームが授業であった。その際、Iには一通の手紙も来なかった。これは自分の成績がよいことや、人付き合いの下手なところを嫌われていると思い、本当の友人が出きない人間だと自分を評価するようになった。

(3) 摂食異常の症例(女性)

元来からまじめ、几帳面、完全癖の強い性格であり、一面では、仲間はずれや嫌われることに対して不安が強く、他人からの評価に過敏であった。成績は優秀であり、学校でのさまざまな役割に対して過剰とも言えるくらい責任を果たしていたが、反面、“ぶりっ子”と思われるのではないかという不安をもっていた。中学3年にクラス替えがあり、親しい友人達とわかれて、唯一人別のクラスに移ることとなった。従って、自分から友人を作ることの下手な彼女は、全く孤独となってしまった。高校入学後も、友人達の態度に過敏な傾向は続いていったが、小肥りであった体型を指摘されたり、あだなをつけられたことを契機として、思春期拒食症的な状態となり、その後過食症へと移行していった。

(4) 同一性意識と関連する自己不全感によって、抑うつ感や情動不安定を呈した例。

自分の意見がなく他人の意見にふりまわされている、自分が何をしたいのかわからない、本当の自分はどこにあるのかなどが問題となっている。

中学・高校時代より、友人がいないことはないが、真の友人が自分にはできないのではないかと、とか、友人達に受容されているかどうか気がになり、好意をもたれるよう、相手を傷つけることのないように気をつけてきた。元来から、がんばりやで、まじめ、几帳面、完全癖が強く、自己不全感や対人不安を補うためもあって勉強につとめ、成績もトップであった。しかし一方では、そのことで仲間はずれにされはしないかとか、友人と心が通いあわないのではないかという不安ももつ

いた。

大学に入ってみて、友人達はもっと自由で主体的な生活をしているのを見て、自分は、自分自身の意見はもっていないし、いつも人にびくびくしている、結局自分は何をしたいと思っているのか、どのように他人とのコミュニケーションをもつたらよいのかわからなくなってしまって、気分がおちこみ、体調もわるくなってしまった。

【Ⅲ】考 索(表3)

これらの学生たちが、おしなべて“良い生徒”であるとみられていることが多いことについては、前にのべたが、ある学生が“学業でもアルバイトでも、きちんとした一日が送れたかどうかが価値基準になっている”とのべていたように、すべての例は強迫性格である。すなわち、まじめ、几帳面、完全癖で努力型の学生達である。また、学校での役割に対しても、強迫的でさえある適応を示している例もある。しかし内面的には自己不確実感、とりわけ対人的不全感があり、傷つきやすい(vulnerable)自我をもっているように思われる。また、そのために、自由に主体的に行動するよりも、他人の評価によって自己をあらしめている印象をうける。さらには、学業が優秀であるにもかかわらず、そのことによって友人達から疎外される不安ももっているのである。以上の如く、強迫性格とともに、弱力的傾向ももっているが、しかし、この内面における不安や葛藤は、他の人々に表白されることはほとんどなく過してきているので、多少とも積極性に欠けるとか、内気、内向性と評されることがあっても、周囲の人々(とくに学校の先生達)には、“良い生徒”、“問題のない生徒”として、彼らの自己不全的な悩みにそれほど気づかれることなく、時は経過してしまうのである。

強迫性格は、このような不確実感、不十全感、とりわけ対人的不全感という弱力的側面に対する性格的防衛⁸⁾(性格の鎧—W. Reich)であるとも考えられる。

この強迫性格(強迫的防衛)は、当然、優秀な

成績、本の虫あるいは自己沈潜的傾向、学校役割に対する強い責任感などのようなあり方につながってゆくが、この成績アイデンティティなどの知性化防衛によって、自己であることの確信や自己尊重の保持、すなわち同一性意識を維持しようとしていたと考えられる。しかしこのような成績アイデンティティの保持にもかかわらず、その事自体にともなうところの、友人達によって疎外されるのではないかと言う不安がつきまとっていた。

この“よい子”と言うパターンがおびやかされる時、その個人が一個の人格として存在するに際して本質的なものと解している価値⁹⁾、すなわちそれによって自己信頼を保持していた価値がおびやかされる時、あるいは同一性の保持がおびやかされたか、ないしはおびやかされる危機として理解される時に、症状形成が行われる。

あるいはまた、その危機に際して、内面にある自己不全感や対人的不安と、それに関連する同一性の不確かさが表に顕著にあらわれ、その問題に直面せざるをえなくなる。この後者では、他人との経験を通して、自己と直面しようと言う発達段階に、その青年がある程度あるという条件が必要であろうが。もっとも、この後者の場合の例では、直面化しようの自我の強さがあるという意味で、病態レベルで考えれば、症状形成の例に比して、subclinical な症例と言いうるかも知れない。

おびやかされるあり方としては、

1. 先の離人症のように、自己に絶体の信頼をもっていた学業（数学）による自己尊重の感情が、尊敬する先生の言葉によって一撃に失われた時、すなわち、対人的不全感を補償していた学業アイデンティティが挫折することによって、より所となる同一性全体が不安定となって、自己否定が行われた場合があげられる。この場合“尊敬している先生から云われた”ことに力点をおけば、対人的疎外体験によるものとも解される。

2. 成績アイデンティティの背景にある対人的不安や孤独感を、友人との疎外体験（仲間はずれや唯一の親友とのクラスわけによる別離体験など）によって、あらためて強烈に体験するとともに、自己や他人に対する信頼感が毀損された場合があ

げられる。

3. 個別的他者として他人（友人達）に出あうところの、主体的で自由なあり方を要請する大学状況の中では、成績アイデンティティや、対人的不安に由来する他人への過敏な強迫適応という適応パターン、あるいはそれによって同一性を保持してきたパターンが、通用しないとすることで、自己の同一性の問題に直面せざるをえなくなった場合である。

次に、いじめられ体験を表白する例（対人恐怖症における S, K, H, および、摂食異常の例など）のあることについてふれたい。いじめられ体験は、客観的事実の如何とともに、本例達の心的現実としてとらえられなければならないが、山本由子氏と坂西友秀氏¹⁰⁾による大学生のいじめられ体験に関する論文の中でもみられるように、いじめられ体験は、同性同世代の仲間による相互的承認を阻害するために、安定した人間関係や安定した自他のイメージの形成に、多大の影響をあたえる。とくにまた、摂食障害の例においては、学校や両親に過剰に適応してきた子供が、級友のねたまれ、仲間はずれにされたことにより発症する症例をみることがあるとのべている論文¹¹⁾も散見されるが、本論文中でのべた摂食障害の例のみならず、著者の経験する他の摂食障害の学生でもしばしばみられた。

また、対人恐怖症の時代的変遷に関して西田博文氏¹²⁾は、近年の対人恐怖が、恥の意識から周囲のおびえの意識を基盤としたところの、外部からおびやかされるタイプに変容しているとのべているが、いじめられ体験をのべている本論文中の例でも、他人不信とともに、拒否されるのではないかとする対人的おびえがうかがいしれる。また一方では、この例の多くは、同時に自己に対する心理的次元でのイメージも低格化的に体験している。

以上の如き、強迫性格およびその背景にある自己不全感や傷つきやすさ (vulnerability) と言うような弱力的傾向などは、家族（両親）に対する内心での不満や反抗と、それを防衛する形での過度の依存に、その対人的パターンの原型を求めてよ

いかかもしれないが、その点については、なお今後の課題としたい。

〔Ⅳ〕おわりに

大学生のカウンセリングでみられた、中学・高校での、成績の秀れているいわゆる“良い生徒”について次のような事項に関して、若干の考察を加えた。

1. 強迫性格と、強迫性格によって防衛されている傷つき易さ(vulnerability)や対人的不全感などの弱力的傾向について

2. 成績アイデンティティなどの知性化的防衛によって、対人的および自己に関する不全感を補償し、且つ成績アイデンティティによって、自己信頼の保持、すなわち同一性を保持していることについて。

3. その同一性保持の挫折の様相と、同性同世代友人との関連について。

4. その他。

苦痛なショック体験が、その人のコンプレックスとしてその後の人格形成にネガティブな影響を及ぼしてゆくか、あるいはポジティブな体験として人格化されてゆくかは、一つにはその苦悩をわかちあえる人がいたかどうかによると考えられる。昨今、登校拒否が話題となることが多いが、他方では、内面的に苦悩しているが、“良い生徒”として見過ごされている本論文中の青年達もおり、時には学内の役割をあたえられて(時には自分からひきうけて)過大な期待を負わされているような場合もある。このような生徒にもアンテナをはって、支持的あるいは共感的なアプローチがなされたならば、その青年のその後の人生のみならず、人格の成熟に対して良い影響をあたえてい

たのではなかろうかと思ったことも、若干の考察を行なった理由である。

なお、本論文の一部は、1990年11月18日の第33回東海学校保健学会の特別講演でのべたものである。

文 献

- 1) 笠原嘉：今日の精神病理像，笠原嘉・清水將之・伊藤克彦編，青年の精神病理1，弘文堂，1976.
- 2) 清水將之：青年期の精神発達と課題，西園昌久編，ライフサイクル精神医学，1988.
- 3) 阪本健二：青年期と精神分裂病—H. S. Sullivanの青年期論をめぐって—，笠原嘉・清水將之・伊藤克彦編，青年の精神病理1，弘文堂，1976.
- 4) Sullivan, H. S. : Interpersonal Theory of Psychiatry, Tavistock, 1953.
- 5) 笠原嘉：青年期，中公新書，中央公論社，1977.
- 6) 池田山子編著：中学生の精神衛生，海鳴社，1986.
- 7) 中尾道子ほか：青年期の対人関係についての精神衛生アプローチ，第2報，第3報，第4報，学校保健研究，第27回日本学校保健学会講演集，1980.
- 8) Salzman, L., 成田善弘・笠原嘉訳：強迫パーソナリティー，みすず書房，1985. (Salzman, L. : The Obsessive Personality, Origins, Dynamics and Theory, Jason Aronson, Inc. New York, 1975.)
- 9) May, R. : Summary and Synthesis of Theories of Anxiety, chapter 6 of The Meaning of Anxiety, The Ronald Press Company New York, 1950.
- 10) 山本山子，坂西友秀：大学生のいじめられ体験，大学精神研究会報告書，第一回，1988年，第二回1989年.
- 11) 武井陽一・若林慎一郎：いじめ，若林慎一郎編，児童青年精神科—現代社会の病理と臨床，金剛出版，1989.
- 12) 西田博文：青年神経症の時代的変換，児童精神医学とその近接領域，9；255, 1968.

(1990年12月3日受付)

表3 症例の生活史的理解

